

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	福若 真人
論文題目	他なるものへと応答する〈倫理〉的主体性の諸相 —レヴィナス思想における「死」と「教え」の教育人間学的意義—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、他者の死への関わりを、レヴィナス (Emmanuel Lévinas 1906-1995) の思想を通して検討したものである。他者の死を経験した者、あるいは、自らの生に困難を抱える者に対して、いかに関わることができるか。他なるものとしての「死」に応答し、「教え」(enseignement) という関わりの中で「死」を取り扱う問題を、レヴィナスの「〈倫理〉的主体性」(subjectivité) の視点から検討する。</p> <p>第 1 章は、レヴィナスが用いる主体性を「主体性」と〈主体性〉に区別する。前者(「主体性」)は、固有性を剥奪し存在一般として主体を繫縛する〈ある〉(il y a) に対する抵抗である。それに対して、後者(〈主体性〉)は、他なるものへの応答関係によって規定される。本論文は、まず前者「主体性」に着目し、「主体の死」を、〈ある〉への融即に対する抵抗と捉えるが、その際、主体には「他者の死」への応答が求められる。その過程に「主体性」から〈主体性〉への変容を見る。</p> <p>第 2 章は、「死者-生者」関係における主体の〈倫理〉的な次元への移行を検討する。レヴィナスによれば、「死者」は「生者」に、「表象し得ないもの」として関わることを要請する。死者を「思い出」のうちに規定し、表象可能なものとして理解するのでなく、あくまで「表象し得ないもの」として関わることを要請する。生者は「死者」の思考に耳を傾け、「沈黙」を埋めてしまうことなく、「徴しとしての合図」を送る。そうした生者の側の〈倫理〉的な関わりが要請される。</p> <p>第 3 章は、同じく主体の〈倫理〉的な次元への移行を、「多産性」(fécondité) や「作品」(œuvre) 概念を通じて検討する。「多産性／繁殖性」には「贈与する権能を贈与する」というはたらきがある。また、他なるものへの忘恩を要請する〈作品〉は、自己に回帰しない「根底的に考えられた」というはたらきがある。それは、存在としての「無」とは別の、主体の自己無化へと向かうはたらきであり、「存在するとは別の仕方」という主体の超越的なはたらきである。</p> <p>以上、第 I 部は、「死」と主体性との関係の中に現れる〈倫理〉的主体性の様相を論じた。続く第 II 部は「教え」の思想を見る。「教え」と主体性との関係の中に現れる〈倫理〉的主体性の様相である。</p> <p>第 4 章は、「師」と学び手の関係に着目する。〈倫理〉的な応答を触発する師の存在、また、師と学び手との関係に立ち現れる〈思考〉のはたらきである。外傷により主体の思考を停止された状態にある学び手が、意味をもった〈思考〉へと反転する過程におい</p>			

て、現前する師との関係が重要になる。そして、師の発話に「耳を傾け」、「問いを立てる」という「ことば」の営みが必要となる。学び手に「発話」を提供し、「問いを立てる」ことを触発する師の役割が、「死」を取り扱う教育における重要となる。つまり、他なるものへの〈倫理〉的な応答として重要になる。

第5章は、「師」と学び手との間で生じる「教え」、また、学び手に必要な主体のありようが検討される。非暴力的な「教え」はいかにして可能となるのか。「聞く・耳を傾ける」(entendre)という営みに着目する。学び手が「暴力的ではない仕方で動かされる」のは、師による「注意」の喚起と、学び手による「聞くこと・問いを立てること」という応答関係によって可能となる。この「聞くこと」には、利害や関心に関わらない「他動性」のはたらきがある。

第6章は、三者以上の関係における主体のありようを見る。「第三者」(le tiers)に関する議論を通して、教え手と学び手の関係に「死者」がどのように位置づくか検討する。二者関係のなかに非現前というかたちで現前する「第三者」は、主体に対して「無限」の責任を駆動させる「彼性」(illéité)のはたらきを持つ。それに対して、二者以上の関係における「第三者」は、無限の責任を中断させ、しかも「比較し得ないものの比較」や「正義をもって私は何をしなければならないか」といった「意識」に基づく応答を主体に要請する。そうした「第三者」として現前する「死者」の内に、「自己を起点とする」主体のありようとは異なるありようを見る。

第I部と第II部の間に置かれた「補論」は、レヴィナスの思想における「ことば」のはたらきを、〈倫理〉的な次元へと移行する主体性との関連において検討する。レヴィナスの「ことば」は、主体の認識や思考に収まりきらない外部にあるもの、すなわち「他なるもの」に関わる。他なるものとの接触、他なるものからの主体へのはたらきかけの発露など、「ことば」は単に自己同一性を支えるのではなく、他なるものへと向かう。

以上の議論を踏まえ、終章は、〈倫理〉的主体性の諸相を整理し、「死」や「教え」をめぐる議論の教育人間学的な意義を検討する。

第一に、「他者の死」を起点とした「死者と生者の別様の関係性」が示される。主体は「他者の死」への応答が求められ、その過程において自己のありようが変容する。レヴィナスの〈倫理〉的主体性は、「他なるもの」への向かい方を重視する。「死」について考えることは、「他者の死」を題材として学ぶことではなく、「他者の死」に対して応答し続けることである。そして、語り直し続ける主体が立ち現れることである。あるいは、死者を生者の自己規定のために領有するのではなく、「表象し得ないもの」に対して「我ここに」という合図を送り続ける。レヴィナスの〈倫理〉的主体性は、そうした「死者と生者の別様の関係性」を要請する。

死者との関わりは、自己を支える意味を失う経験ともなる。その失った意味を再び産

出させる〈思考〉を、本論文は「教え」のうちに見る。「教え」において、教え手と学び手は、「聞く」、そして「問いを立てる」仕方で応答し合う。そこから見た時、「死」について教育で取り扱うことは、「問い」を語り直し、他なるものに応答する〈倫理的主体性〉へと変容させる機会である。死者と生者の関係を別様の仕方で探求することが、「死」と「教え」の教育人間学的な意義である。

第二に、〈倫理〉的な主体性の諸相を、他者への無限責任とは異なる文脈において提示する。「自己の死」の限界を克服する思想として、中期の「多産性／繁殖性」や、中期から後期にかけて探究された〈作品〉に関する議論を見た。そして「同一的な項の存続とは別の仕方で連続性を確認する」、あるいは「自己回帰しない」主体のありようを確認した。それは、無とは異なる「自己無化のはたらき」である。また、「教え」の関係に見られる「聞くこと」の他動性には、「主語となる主体に利害や関心が含まれないような」はたらきを見た。いずれの議論も、後期の「存在するとは別の仕方」と同義であるわけではないのだが、「存在するとは別の仕方」という議論に通ずる萌芽が見られる。この点において、レヴィナス理解の問題として、中期思想から後期思想に至る過程を「転回」と捉える解釈に対し、近年提起されている「深化」と捉える解釈を支持することになる。

第三に、他なるものへの応答において、多様な「ことば」の介在が〈倫理〉的な関わりを可能にする点を確認する。〈倫理〉的な応答において主体は「語り」を介した関わりを持つ。しかしそれ以外にも、言語の裏返しとしての「沈黙」や「本物のテキスト」、「根底的に考えられた〈作品〉」が介在し、「挨拶」や「書かれたもの」といった「ことば」もある。レヴィナスはそうした「ことば」の危うさ・暴力性を見つめつつ、「ことば」への向き合い方のうちに「哲学」という営みの意義を見て取ろうとしていた。

以上の視点は、「教え」や「学び」のプロセスにおいても不可欠である。「ことば」を「聞くこと」、その営みを通じて他なるものの前に身を置くことは、〈主体性〉の出来が「ことば」によって駆動されていることを意味する。構築された知によって他なるものを同化するのではなく、むしろ、構築された知を破壊する外傷を受け、意味を失った状態から、再び〈意味〉へと反転することを促す営みである。

しかし、その営みは、教え手と学び手の間で、常に働くわけではない。それゆえ、「死」と向き合う際には、自己回帰とは異なる地平へと向かう媒介として、「ことば」の介在が、より一層求められる。そして、主体は他なるものへの〈倫理〉的な応答において、「存在するとは別の仕方」を探究する「問い」へと開かれる。他なるものへの〈倫理〉的な応答をめぐる「問い」と語り直しは、喪失や自らの生に苦しむ者だけでなく、無関係と思われる者にも、「教え」として開かれることによって、「他者の死」や「自らの死」をめぐる苦しみへの応答の契機となる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、死の問題を、レヴィナスの思想から検討したものである。他者の死を経験し、あるいは、自らの生に困難を抱える者に対して、私たちは、いかに関わることができるか。レヴィナスが論じた「死」と「教え」(enseignement)の議論を通して検討する。

重要なのは、「他者に応答する主体性」という視点である。死の問題として言えば、自己の実存様式としての「死へと向かう存在」(ハイデガー『存在と時間』)ではなく、「他者の死」が問題になる。正確には、「他者の死へと応答する主体性」を問題にし、そこに「〈倫理〉的主体性(subjectivité)」への変容を見る。

「死者」の理解も興味深い。レヴィナスによれば、「死者」は「生者」に、「表象し得ないもの」として関わることを要請する。死者を、「思い出」のうちに規定してはならず、また、表象可能なものとして理解してはならない。あくまで「表象し得ないもの」として死者に耳を傾け、「沈黙」を埋めてしまわぬよう、しかし生者の側から「徴しとしての合図」を送り続ける。そうした生者の側の〈倫理〉的な関わりが要請される。

「教え」については、〈倫理〉的な応答を触発する「師 maître」の存在が重要である。学び手には、師の発話に「耳を傾け」、「問いを立てる」という「ことば」の営みが必要となる。さらに、この問題は、暴力的にならない「教え」はいかにして可能かという問いと結びつく。学び手が「暴力的ではない仕方で動かされる」のは、師による「注意」の喚起と、学び手の側の「聞くこと・問いを立てること」との応答関係による。そうした応答関係が、「死」を取り扱う教育の構想に、極めて重要な示唆を与えることになる。

本論文の優れた点は、以下の三点である。

第一に、「死を扱う教育(「デス・エデュケーション」に限定されない)」の問題を、レヴィナス思想の視点から、哲学的に検討した点である。教育において「死」をいかに扱うか(扱いうるか)という問題は、極めて多次元的な考察を要する困難な問題であるが、本論文は、レヴィナスにおける「死」の考察と「教え」の考察を組み合わせることによって、その議論の枠組みを設定することに成功した。従来の議論が、この次元の考察を必要不可欠と述べ(しかもしばしばレヴィナスの名を挙げながら)、実際には遂行してこなかった課題に、適切な議論の枠組みを提供したことは、大きな貢献といえる。確かに、実践的な具体的問題には踏み込むことができなかったが、「死を教える」という出来事に含まれる問題性を、ここまで提示したことは、今後の「死と教育」をめぐる議論に大きく寄与するものと判断される。

第二に、レヴィナス研究における貢献である。今日、国内外におけるレヴィナス研

究の進展は目覚ましく、様々な視点から研究が積み重ねられているが、「死」の問題を主題とする研究は限られ、まして、それを「教え」の議論と組み合わせ、「〈倫理〉的主体性」の問題として深めた研究は稀である。レヴィナスの「教え」に関する教育学的研究に新たな視点をもたらしたものと評価される。

第三に、この領域における「ことば」の重要性に、あらためて着目した点である。第Ⅰ部と第Ⅱ部の間に置かれた「補論」は、「ことば」のはたらきを〈倫理〉的な次元へと移行する主体性との関連において検討している。レヴィナスの「ことば」は、認識や思考に収まりきらない外部、すなわち「他なるもの」に関わる。単に自己同一性を支えるのではない。「ことば」は、他なるものへと向かい、他なるものから働きかけられる際の、貴重な媒介となる。言葉を超えた次元（言葉にならない情念）に関わる「死を扱う教育」における「ことば」の働きについて、貴重な示唆を与えたものと評価される。

口頭試問においては以下の点に関して質疑が行われた。1)レヴィナス晩年の思想、とりわけ「他なるもの」に「曝される・襲われる」という視点と、「教え」の視点との関連を明確にしておく必要があったのではないか。2)「教え」における「師」の在り方を、強制と自由の視点からより詳細に検討する必要があったのではないか。3)「子ども」という存在の特異性についても、あるいは、死以外の他者との関わりについても、確認しておく必要があったのではないか。

しかしこうした問題は、すべて本人も十分に自覚し、今後の課題としていることから、本論文の価値を貶めることにはならないことが確認された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年6月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降